

[分かち合う世界へ]48、アフガンで育つ日本米

アジア自立支援機構代表理事・小沼廣幸

2021/11/07 16:32

あれは今から30年近く前、アフガニスタン東部の町ジャララバードを訪問した時のことだ。同行した現地人が、アフガニスタンでも日本米が栽培されていると、誇らしげに自慢して郊外の村を案内してくれた。

半信半疑だったが訪れてみると本当に日本米だった。日本の田園風景を思い出すような整備された幾つもの小さな水田で日本米が生育しているのを見て目を見張った。

一体誰が日本米をこの地に広めたのか、アフガン人が日本米を食べるのか、不思議に思って聞いたところ、アフガンでは日本米の需要があるのだという。粘り気のある日本米は砂糖などと混ぜてお菓子や甘いお粥(かゆ)状の食べ物を作るのに人気があるという。昔日本人がこの地域に広めたのだ、ということだった。

その翌年、イランに出張した折に、たまたま同じホテルのレストランで出会った日本人の稲作の専門家の一人から、彼が1960～70年代に日本政府から派遣されて同地域で稲作のプロジェクトに参加していて、その地域の農民たちに日本米の栽培を普及したのだということだった。その事業はソビエト軍の侵攻や治安の悪化により中止になり、そのままになっているということだった。

私がジャララバードで見た日本米の水田は、日本のプロジェクトが中止になってから20年余りもたってからのことになるが、農民たちは日本の援助が途切れた後も、日本の稲作の技術をしっかりと長い間、自分たちの努力で受け継いでいた。

アフガン人というと、日本ではあまりなじみが無く、一般に面長で鋭い目をした髭(ひげ)面で近寄りたいたいイメージを抱きがちだ。しかし、実際は繊細でナイーブな感情を持ち、他の人たちの気持ちを気遣う優しい心を持った国民性と、遊牧民族にありがちな疑い深さと敵と味方をはっきり区別するメンタリティーの双方を一般に持ち合わせていると私は思う。

それは押しの強い隣国のインド人やパキスタン人とは大きく異なり、どちらかという控えめで、感情を自分から率先して表に出さない東南アジアの人々と似ているところがある。

私がジャララバードを訪れた1990年代半ばは、農民たちは一様にタリバンを歓迎し、これで平和が訪れると、タリバンに期待を抱いていたのを思い出す。96年にタリバンが樹立したイスラム国家は、こうした期待に反して、イスラム原理主義に意固地になり、間違った方向に進み国際社会から徐々に孤立し崩壊してゆく。

当時を振り返って思うのは、欧米を中心とした国際社会の高圧的な態度にも原因があったように思う。子供を扱うがごとく、脅して服従させようとする試みや、厳しい条件付きの援助はタリバン政権をますます意固地にさせ、孤立に追い込み、そのしわ寄せは貧しい国民に降りかかった。

われわれは同じ過ちを繰り返すべきではないだろう。心の扉を開けるには冷たい北風より、暖かい温風の方がはるかに効果がある。タリバンが二度目の政権を樹立してから約3カ月、安定政権を築けるかどうかの国際社会との駆け引きが続く。国連はアフガニスタンの人口の半数以上が急性の食料不安に直面しており、これから寒い冬になり、数百万人が餓死するだろうと警告した。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士(農学)。元国連食糧農業機関(FAO)事務局長補兼アジア太平洋局長。元明治大学特任教授。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人(非営利)アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。